

主日礼拝
2025年2月16日
「キリスト者の帝王学」
詩篇21篇（新共同訳）

1 導入部

みなさん、おはようございます。一言、お祈りをします。…

12月以来の奉仕になります。最初に自己紹介をしたいと思います。塚本良樹と申します。私は、2018年から2021年3月まで、この教会で青年担当牧師、ユースパスターとして奉仕していました。この教会で結婚式を挙げさせていただきまして、本当にお世話になりました。今は、だいたい年に2回のペースで来させていただき、ご奉仕させていただいています。

さて、私がこの教会にいたときから、詩篇を連続して語らせていただいていたので、今回は20篇でしたので、今日は21篇から語らせていただきたいと思います。

2 本論部

一. 王たちのために祈ってきたか？

この詩篇21篇もまた、前回の20篇と同様、「王の詩篇」と呼ばれます。12月に、私が詩篇20篇から語ったとき、私たちはこの世の王たちのために祈っているか、ということが問われたかと思いますが、その後いかがでしょうか。

クリスチャンにとって、家族のため、友人のため、教会のために祈ることは比較的身近に感じますが、王のために、国のリーダーのために祈るといって、少し心理的な距離があるという方もいらっしゃると思います。

日本にいる王とは誰でしょうか。天皇、総理大臣、国会議員、官僚たち、市長や市議会議員、そして選挙権をもつ全ての国民が、権力を持っています。この日本を動かすことができるわけですが、この王たちのために、私たちは祈ってきたでしょうか。正直に言えば、私自身はあまり祈れなかったなあと思います。

二. 混乱を極める世界の状況

先週の火曜日、2月11日は「建国記念の日」でした。お休みの日でしたが、なぜこの日が「祝日」、正式には「国民の休日」ですが、なぜお休みかをご存知でしょうか。

それは、日本の神話によれば、神武天皇という初代の天皇が即位した日とされており、もちろん神話ですので、事実ではないということで、あくまでも記念日ということで「の」がついているんですね。なので「建国記念日」とは言わないですし、「祝日」と言うのはどうなのか、と言われてたりするわけですが、この日本という国が、異教の国、神道の国であるということをもっと感じる日の一つであると思います。

私たちが生きる日本の政治的状況は非常に厳しいものです。もっとも身近な問題は物価高でしょう。重い税金の問題、不正の問題、そして日々悲しい事件が起きる。メディアの問題もある。世界に目を向けると、アメリカや韓国では社会が分断され、イスラエル・パレスチナの地では、ウクライナ、コンゴなど、多くの地域で、血が流され続けている。

そのような状況のなかで、今現在、この世界で立てられている王たち、政治家や官僚たちも、もちろん努力はしていると思います。その意味で敬意は払いたいです。とても良い支配ができているとは言い難いと思います。

本日のメッセージのタイトルは、「**キリスト者の帝王学**」とさせていただきました。「帝王学」というのは、通常は、王様や皇帝など、特別な地位、リーダーシップを取る人が、その立場にふさわしい能力を養うために受ける教育を意味します。聖書のなかで、王のあるべき姿、つまり帝王学については多くの記述がありますが、この詩篇21篇も、王がどうあるべきか、王がどのように生きることが幸いであるか、ということを描いている、詩篇ですので歌っている、そんな聖書箇所の一つなのです。

三. 神の力と救いを喜ぶ

前置きが長くなりましたが、早速詩篇21篇を読んでいきたいと思えます。2節からをご覧ください。

21:2 主よ、王はあなたの御力を喜び祝い／御救いのゆえに喜び躍る。

まず、詩篇21篇で語られている、王のあるべき姿、帝王学は、「神の力と救いを喜ぶこと」です。神の力と救いを喜ぶこと。

みなさんは、神の力と救いを喜んでいるでしょうか。そのような賛美を歌うことはありますが、私自身の日々を振り返ると、クリスチャンとして、神様を信じてはいても、神様の力と救いを喜んではないということが多くあります。実質的には神様の力を信じることなく、自分の力の方を、人間の力を信じてしまう、頼ってしまうことがあります。私自身、自分が、自分の力、人間の力に頼っているなあと気づくのは、どういうときかと言うと、祈らないときです。

みなさんは分かりませんが、私の傾向として、何かトラブルがあったときに、祈るよりもまず、対策を考えたり、調べたりするんですね。実はこのメッセージを準備しているときにも、ちょっと家でトラブルがあって、この部分をすでに書いていたにもかかわらず、まず祈るよりも、対策を考えていた自分がいて、恐ろしくなりました。

もちろん誤解しないでください。「自分の頭で考えたり、調べたりすることなんて不要で、ただ祈っていれば良い！」という意味ではありません。まず祈って、神様に頼って、神様からの知恵を求めて、その上で、考えたり、調べたりすることが大切なのです。みなさんはいかがでしょう。お仕事で、あるいは日常のなかで、何かトラブルが起きたとき、まず神の力に頼っているでしょうか。まず祈っているでしょうか。

王の働きにおいて、リーダーの働きにおいて、トラブルはつきものです。繰り返しますが、そのときに、人間の知恵、歴史から、あるいは周囲の人から助けられることも大切です。しかし、すべての人間よりも、力があるのは神である。だからこそ、まず、神の力に頼っているか、神の力を喜んでいるかということが問われるのです。

あるいは、神の救いを喜んでいるでしょうか。自分たちが救われたという事実の重みを感じないということが、私自身にもあります。それは、自分の弱さを忘れているときです。私は人生のなかで何度か、自分の弱さに打ちのめされる経験をしました。それは辛い経験でしたが、そのときに、最も謙虚にされ、そして同時に、イエス様の十字架の重みを最も感じたという意味では、本当に幸いな経験でした。

私たちは、神の力と救いを喜んでいるでしょうか。詩篇21篇は、「神の力と救いを喜ぶこと」、それが第一に、王に求められることであると言うのです。

四. 正直に願う

その上で、王のあるべき姿、帝王学の二つ目は、「正直に願うこと」です。正直に願うことです。3節からをご覧ください。

21:3 あなたは王の心の望みをかなえ／唇の願い求めるところを拒まず〔セウ

21:4 彼を迎えて豊かな祝福を与え／黄金の冠をその頭におかれた。

21:5 願いを聞き入れて命を得させ／生涯の日々を世々限りなく加えられた。

神は、「王の心の望みをかなえ／唇の願い求めるところを拒ま」ない。「願いを聞き入れて命を得させ」てくださる。すごいことを言っていますが、そもそも、私たちはどれくらい神様に願っているでしょうか。私自身、もちろん祈りますし、願いごとにも神様に伝えますが、けっこう当たり障りのないことばかりというか、いずれにしても叶いそうなことばかり祈ってしまうことがあります。守ってください、みたいな。私たちは正直に願っているでしょうか。

神様は、王の「願い求め」を「拒ま」れないとあります。すべての祈りが確実に神に届いています。神様はすべての祈りを「聞き入れて」くださっています。神様は、「王の心の望みをかなえ」てくださるとあります。神は、私たちの願いを叶えてくださる。もちろん、全ての願いが、私たちが想像するタイミングで「かなえ」られるとは限りませんが、必ず、最善を為してくださる。

4節に「豊かな祝福」とあります。この「祝福」という言葉も、私自身けっこう誰かのために祈るときに軽く使っちゃう言葉なのですが、この言葉は、「私たちの幸せは、神に由来する、神が一方的に与えてくださったものである」という信仰に基づいた言葉です。私たちの幸せは、神に由来する、神が一方的に与えてくださったものである。続く「黄金の冠」というのは、勝利の象徴ですが、それを王の「頭にお」いてくださるのは、神なのです。ただ神が、そのみこころのままに与えてくださるのが勝利であるという信仰を表しています。

5節に「命を得させ生涯の日々を世々限りなく加えられた」とあります。これはただ長生きすること、長寿を祈っている可能性もありますが、「世々限りなく」、つまり永遠を祈っていますので、ちょっと君が代っぽいですね。君が代は、もともとは恋愛の歌、あるいはただ長寿を願う歌であるとされていますが、明治時代以降は、天皇が支配する世界が、千代、万代、いや永遠に続きますように、という聖書の終末論と真っ向からぶつかる歌とされていますが、まことの神様に、健康が与えられ、長寿が与えられるように、病気から、怪我から、事故から、災害から守られるように祈ることは大切なことです。そして仮に、この地上で死を経験するとしても、永遠のいのちが与えられることを、感謝しつつ、その確信が与えられ、死の恐怖から守られるようにと、正直に願うことも大切なことです。

続く6節をご覧ください。

21:6 御救いによって王の栄光は大いなるものになる。あなたは彼に栄えと輝きを賜る。

21:7 永遠の祝福を授け、御顔を向けられると／彼は喜び祝う。

21:8 王は主に依り頼む。いと高き神の慈しみに支えられ／決して揺らぐことがない。

ここでも、神の「救い」、「永遠の祝福」、「神の慈しみ」という言及がありますが、このようにたくさんのものを与えてくださる「主に依り頼む」とき、「決して揺らぐことがない」ことが語られます。

私たちには、「揺ら」ぎそうになることがあります。この世界にあって、思いがけない状況に直面するときに、揺らぎそうになります。実は、このメッセージを作っているなかで、ある夜、クタクタに疲れてしまうときがありました。体の疲れだけでなく、仕事でもあまりうまくいかなくて、落ち込んでしまったときがありました。妻と息子が励ましてくれ、祈ってくれ、また親族も祈ってくれたのですが、私自身も、神様に正直に祈りました。そのなかで、不思議と平安のうちに眠ることができ、朝には回復できました。

王にとって、リーダーにとって、最大の敵は何でしょうか。もちろんいろいろありますが、私が思うのは、疲れであると思うのです。リーダーは重い責任を負っていますので、リーダーであるという事実だけで、生きているだけで疲れます。そして、疲れるとき、私たちは恐れに、不安に、疑いに支配されやすくなります。そして、疲れがあるとき、恐れに、不安に、疑いに支配されるとき、リーダーは、判断を間違えます。過剰に誰かを攻撃してしまうことだってあります。だからこそ、休むことが大切ですし、特にそのなかで、正直に祈る、神様と真正面から向き合うことが大切なのです。「正直に願うこと」。これが、王に求められる二つ目のことです。

五. やがて正義がなされることを覚える

最後に、王のあるべき姿、帝王学の三つ目のことは、「やがて正義がなされることを覚えること」です。やがて正義がなされることを覚えることです。9節からをご覧ください。

21:9 あなたの御手は敵のすべてに及び／右の御手はあなたを憎む者に及び。

21:10 主よ、あなたが怒りを表されるとき／彼らは燃える炉に投げ込まれた者となり／怒りに呑み込まれ、炎になめ尽くされ

21:11 その子らは地から／子孫は人の子らの中から断たれる。

21:12 彼らはあなたに向かって悪事をたくらみ／陰謀をめぐらすが、決して成功しない。

21:13 かって、あなたは彼らを引き倒し／彼らに向かって弓を引き絞られる。

ここで語られていることは、やがて悪は滅び、必ず正義が実現するということです。今のこの地上においても、正義が実現することはあります。神は、この世界を、宇宙を正しいものとして、造られたので、もちろん罪があっても、ある程度の正義がなされている。クリスチャンじゃなくても、良い人はいっぱいいます。

でも、それでも、この世界の現実を見ると、そこには、不正が、貧困が、戦争があります。とても正義がなされているとは思えない現実が広がっています。でも、その世界のただなかに、イエス様が来られ、そのことばと行動によって、特に十字架にあって、愛を、正義を示されました。そして、教会を通して、今日も、この世界に愛と正義を広げようとしておられる。そして、やがてイエス様はもう一度来られ、最終的に愛と正義をなしてくださる。

このことを覚えていないと、このことを思い出し続けないと、私たちは恐れに、不安に、疑いに支配さ

れてしまうのです。このままこの世界はダメになっちゃうんじゃないか。自分が今やっていることに意味なんてないんじゃないか。死んだら何も残らないんじゃないか。

これは何度も話していることなので、聞き飽きた方もいるかもしれませんが、大切なことなので今日もお話しますが、私は映画やドラマを観るときには、最新版でなければインターネットに「ネタバレ」のウェブサイトがあると思うのですが、観る前に、終わりがどうなるかをチェックしておくんです。あくまでもチラッとです。そうでないと楽しみがなくなってしまうので。

そして、そうすると、安心するんです。ああいろんなことがあっても、ドキドキすることがあっても、苦しみがあっても、最後はこうなるんだな。最後はハッピーエンドなんだなって分かる。そうすると、安心して映画を観られるわけです。これは全く理解されない私の趣味のようなものですが、何が言いたいのかというと、クリスチャンの人生は、そのようなものであるということなのです。

終わりの日、イエス様がもう一度来られるとき、すべての出来事の意味が分かるのです。すべてを、悪く見えたことさえも、益としてくださった、良いものとして用いてくださったことが分かる。それまでの間も、クリスチャンは、すべての出来事に意味があるってことは知っています。それはすごいことです。でも、すべての出来事に意味があるってことは知っているとしても、どんな意味かということは分からないことの方がほとんどです。「このためだったのか！」と分かることもあります。それは感謝なことです。でも、分からないことの方が多い。簡単には、答えが出ないことの方が多いのです。

でも、私たちは知っているのです。物語の最終ページをチラッと見たのです。全部は分からない。終わりに至るまで、何があるのか、終わりはどのようなものなのか、分かることもありますが、分からないこともあります。でも、私たちは知っているのです。終わりはハッピーエンドであることを。そこには愛と正義があることを。終わりの日、私たちはダビデとともに賛美するのです。14節をご覧ください。

21:14 御力を表される主をあがめよ。力ある御業をたたえて、我らは賛美の歌をうたう。

その日を待ち望むゆえに、私たちは、物語の途中で何があったとしても、苦しみのなかを通るとしても、涙を流すことがあったとしても、終わりにあるものに安心しながら、辛いときには正直に祈りながら、神の力と救いを喜びながら、安心と、自信と、確信をもって歩み続けることができるのです。

3 結論部

この詩篇21篇は、「**キリスト者の帝王学**」として、神の力と救いを喜び、正直に願うこと、やがて正義がなされることを覚えることの幸いを語っています。

私たちは、この世界に立てられた王たちが、そのように生きることが、この世界の悪が、悲しみが少しでもなくなるように祈りたいと思います。そして、同時に私たちが覚えたいのは、これも前回お話ししたことです。聖書からすれば、キリスト者一人ひとりが王として、この詩篇21篇で歌われているように生きることができるということです。

この詩篇21篇を書いたとされるダビデは、この詩篇のように生きることができた、王としての使命に生きることができた時期もありましたが、結局は失敗しました。ダビデ以降の王たちも、基本的には失敗しました。しかし、ダビデの子孫としてこの世界にお生まれになったイエス様は、この世界の王として、正しくこの世界に仕えられました。そのことばと行動によって、特に十字架にあって、愛を、正義を示さ

れました。その意味で、イエス様は王として来られましたが、しもべとして終わりまで仕えられました。

そして、イエス様は、イエス様を信じるキリスト者に、イエス様と同じように、王としてこの世界を支配することを、この世界を管理することを、しもべとして、この世界に仕えることを、この世界に愛と正義をもたらすことを求めておられます。

もちろん私たちがなすことには、限界があります。失敗があります。戦いは励しいのです。誘惑はあるのです。それでも、私たちは諦める必要がないのです。なぜなら、イエス様が、あなたを、そしてこの世界を諦めておられないからです。イエス様の力、復活の力、聖霊の力によって、少しずつでも、この世界に愛と正義をもたらすことを、神の力と救いを喜びながら、正直に願いながら、やがて正義がなされることを覚えながら、平安のうちに、「**キリスト者の帝王学**」をなす歩みへと、イエス様は、この礼拝からあなたを遣わされようとしているのです。

この世界に、愛と正義をもたらすために、あなたにできることは何でしょうか。小さなことでも良いのです。大切なことは、大きく祈って小さく始めることです。あなたが王として、なしたいと願うは何でしょうか。

応答の賛美：主よ終わりまで（新聖歌 385）

1. 主よ終わりまで 仕えまつらん みそばはなれず おらせたまえ 世の戦いは はげしくとも 御旗のもとに おらせたまえ
2. 浮世の栄え 目を惑わし 誘いの声 耳に満ちて 試むるもの 内外にあり 主よ、我が盾と ならせたまえ
3. 静かににきよき 御声をもて 名利の嵐 静めたまえ 心に騒ぐ 波はなぎて 我が主の御旨 さやに写さん
4. 主よ、今ここに 誓いを立て しもべとなりて 仕えまつる 世にある限り この心を 常に変わらず もたせたまえ